

地震の発生 二〇〇九年一〇月十八日（日曜日） 午前七時五十六分

震源地 新潟県中越地域

地震の規模 マグニチュード六・八

山古志地区の震度 六強

最初の場面となる場所 梶金地区一時集合場所（集落センター）

気温 約十五度 くもり

課題 発生直後の集落内での安否確認

【ストーリー】

状況設定（ナレーションも可）

ある秋の休日、午前八時ごろ、新潟県長岡市山古志に直下型の地震が発生する。山古志の震度は六強。山古志の五十嵐雄一さんは、火災で全焼した倉庫の初期消火を終え、妻の避難している梶金集落センターへ戻る。そこでは梶金地区区長さんをはじめ、地区防災会長さん達がケガ人の収容や状況確認をし、救助が来るまでの避難生活乗り切ろうとしていた。

第1話 登場人物（イメージ） 役割・立場

- ・ 五十嵐雄一（男性：お父さん） 梶金地区の住民。防災会では初期消火班員
- ・ 五十嵐まみ（女性：小学生） 雄一の娘。山古志小学校に通う小学生
- ・ 五十嵐恵美子（女性：お母さん） 雄一の妻。防災会では炊き出し班
- ・ 星野（男性：防災会長） 梶金地区の自主防災会長。衛星携帯電話を設置
- ・ 長島（男性：梶金地区区長） 梶金地区の区長。地区の最高責任者
- ・ 避難者男A： 梶金地区の住民。火事的第一発見者
- ・ 避難者女B： 梶金地区の住民。農家のため炊き出し用の野菜を持ってくる
- ・ 星野（男性：避難誘導班） 梶金地区の住民。避難誘導班員
- ・ 関（男性：避難誘導班） 梶金地区の住民。避難誘導班員
- ・ 松田淳（男性：独居老人） 寝たきり。タンスが倒れて足をケガし救助される
- ・ 荒木（女性：給食給水班） 梶金地区の住民。給食給水班員
- ・ 松田（男性：支所職員） 山古志支所職員。若手の主任
- ・ 丸山（男性：支所職員） 山古志支所職員。係長の主査
- ・ 丸山（男性：情報伝達班） 梶金地区の住民。軽トラックで道路状況調査する

解説（ナレーション：毎回共通）

独立行政法人・防災科学技術研究所では、災害時に地域に起きることを住民主体で考えるための方法として、地域の災害シナリオの作成を提案しています。災害シナリオは、行政が作成した各種災害の被害想定やハザードマップを下敷きにして、地域の「より細かい事情」を勘案して、災害時に実際に起きることを時間に沿って具体的に整理して記述したものを指しています。災害シナリオは、地域の関係者が具体的に自分たちの直面する事態を考える仕組みづくりのきっかけとなるものです。シナリオにすることで、事態の展開していくイメージが掴みやすくなり、必要な対応もわかりやすくなります。

注意（脚本内の青文字は状況説明のための記述であり、読まない）

【第二話】五十嵐雄一が倉庫火事の初期消火に向かっている時、避難所の集落センターでは、避難誘導班が独居老人の淳さん宅に救出に向かおうとしていた。

避難誘導班が独居老人の淳さん宅に到着

星野（避難誘導班）：おーい、あつしさん、大丈夫らけ
関（避難誘導班）：返事してくれのー。たのむすけ
星野（避難誘導班）：返事がねえな。淳さん寝たきりらんだ、家の中入ろうや
関（避難誘導班）：いろんなもの倒れてるすけ、気をつけていこうれ
松田淳（独居老人）：おうい、こちらで。助けてくれて
関（避難誘導班）：おお、淳さんの声がするで、こつちら、奥の居間らて
星野（避難誘導班）：ああ・・・タンスの下敷きになってる。大丈夫らけ
松田淳（独居老人）：足が痛い。足が痛いて
関（避難誘導班）：淳さん、いま助けるっけの、ちっと我慢してくれの

避難誘導班二人でタンスを持ち上げ、淳さんを救助する

星野（避難誘導班）：これから避難所に連れてくすけ、安心しれ
松田淳（独居老人）：足の上にタンスが落ちてきた。凄く足が痛いて

関（避難誘導班）：こりや足が折れてるな。変な方向に曲がってるて。触ると痛いだろうけど、慎重に運び出そうて

星野（避難誘導班）：下手に二人で運び出して落としたりなんかしたらえらいことになる。俺が区長さんところに戻って人呼んでくるすけ、おめさんここで応急手当してやっててくれて

松田淳（独居老人）：うう・・・ああ・・・痛い、動かさんでくれて・・・

関（避難誘導班）：そうらな、わかった。淳さん、もうちつとの辛抱らて、頑張ってくれの。あ、あと、星野さん、あつしさん失禁してるんだ、着替えもたのむわ

星野（避難誘導班）：失禁？こりや大変だ。大事に至らないといいが。わかった。急いで行ってくるっけね

星野（避難誘導班）が急いで区長の元へ移動。連絡をしに行く。残った一人は応急処置をし始める。

一方、集落センターでは給食給水班が話し合っている。

荒木（給食給水班）：ここに非常用の食糧は少ししかねえすけ、各家庭から食材を持ってきたてもらわんと、みんなで自炊できねえ

五十嵐恵美子：防災会長さんに各家庭から食材を持ってきたてもらうように指示してもらおうて

荒木（給食給水班）：米はどこの家もあるだろうから、米は持ってきたてもらうとして、冷蔵庫に入っているものは早く食べたほうがいいから、持ってきたてもらうとき分けようて

星野（防災会長）：おーい、皆さん聞いてください。救助隊が来るまでの間、おおむね二三日の間、ここで自炊して生活しなければならぬ。そこで、給食給水班で皆さんの食事を作ってもらおうえで、食材が必要です。動ける人で家まで戻れる人は、家にある食材を持ってきてもらわねるか。米はもちろん、冷蔵庫のものも持ってきてください。

ざわつきながらも若い人中心に各家庭に食材を取りに行く

荒木（給食給水班）：この米、この大釜で炊くのはいいろも、どうやって炊くがら？電気通ってねえから、発電機が必要らて

星野（防災会長）：おい、ここに発電機持ってきてくんねろか。集落センター倉庫にあるすけ。あと、テントも設置してくれて。雨が降ったら大変だ

五十嵐恵美子：ところでこの水道ちゃんと出るんだろか（蛇口をひねると濁った水が出てくる）あっきや、ちっと濁ってるろ、これじゃご飯炊けねえろ

星野（防災会長）：裏に井戸水のポンプがある、その水を使おうて、誰か、そのポリで汲んできてくんねろか

住民が大きな炊飯釜・発電機を持ってくる。他の住民が汲んできた水をポリに入れ、持ってくる。

五十嵐恵美子：ようし、米炊く準備ができたれ、さっそく作るれ

荒木（給食給水班）：恵美ちゃん、こんがでかい釜でどうやって米磨いで炊くがら。おらさっぱりわからんて

五十嵐恵美子：こうやって、ビニール袋にお米と水を入れて縛って・・・この

大釜の沸騰したお湯に入れればいい

荒木（給食給水班）：ああ、わかった。防災訓練でやったわね、これ。

一方、情報伝達班は、区長の役割分担指示に従い、周辺の道路情報を調べに、軽トラックに乗り、木籠集落方面を目指していた

丸山（情報伝達班）：おい、あその山見てみれて。山肌が出て・・・土砂崩れら、こりやだめろ、通行できねえて。すぐにセンターに戻って区長に報告らて

情報伝達班は集落センターへ戻り、区長に報告する

丸山（情報伝達班）：長島さん、大変らて、支所・竹沢方面も土砂崩れで通行不能らったみてえらけど、さらにさっき木籠集落方面も見えてきたろも、土砂崩れで通行不能らったて

長島（梶金区長）：そりや大変だ。孤立してしまう。そうなると道路からの救援・救助は無理ってことになる。丸山さん、悪いろももう一方の大久保方面の道路見えてくんねろか

丸山（情報伝達班）：わかった。道はガタガタらけど、軽トラックで通れるんだ、行ってくるて

給食給水班が炊き出しの準備を始めていると、しばらくして近くの住民達が家にあつた食材を持ち寄ってくる。

避難者女B : どっこいしょ、と。おうい、えみちゃんや、炊き出しの食糧持ってきたれ。リアカー動いたんだん、裏の畑から山ほど積んできたてー

五十嵐恵美子 : いやあ、わりいねえ。こんがいつぺこと食材が集まったてー、さて。何作ればいいがらこんなに

荒木（給食給水班） : どこん家も冷蔵庫でつけえからね。おらちは二個もあるれね。ばあちゃんもいつぺ保存するすけ

五十嵐恵美子 : こんだけあれば二、三日は何か作れるけど・・・日持ちの悪い冷蔵庫から持て来たものから作ろうかね

荒木（給食給水班） : カレーらね。カレーなら何入れてもいいろ。五十嵐恵美子 : そうらね。でもじゃがいもがあんまりないねえ。

避難者男A : おおい、遅くなって申し訳ねえ、うちで採れたもん持ってきたれ。まだ小屋にいつぺことあるすけ食っててくれ

五十嵐恵美子 : ヤーコン、こんがいつぺかね。

避難者男A : 悪くなるともったいねえすけ、食っててくれ

荒木（給食給水班） : ヤーコンカレーらね、こりや。

避難者男A : 栄養満点らねつかて、わっはっは

五十嵐恵美子 : 玉ねぎはあるけど、せめて人参がもつとほしいて

避難者女B : おお、それなら高野さん家に行けばいつぺあるはずだ。この前収穫してたんだ。あそこの婆さん腰悪いすけ、おらちよつくら行ってくるて。とりあえずこのリヤカーの上にある野菜降ろしてくれて

荒木（給食給水班） : わーりいねえ。こりやばつかうんめえカレーができるて。

避難者たちと給食給水班たちは笑いあう

そこへ避難誘導班が区長の元へ到着。負傷者発生の報告をする。

星野（避難誘導班） : 区長さん、今戻りましたて。はあ・・・はあ。
長島（梶金区長） : おお、星野さん、淳さんはどうだったね。

星野（避難誘導班）：タンスの下敷きになっていたらも、生きてたて。そんで運び出そうとしたけど、足が折れているみたいで二人じゃ運べなかったて。ちよっと若えもん手伝ってくんねろか。

長島（梶金区長）：おお、わかった。「おうい、星野会長さん、避難誘導班に二、三人若いもん救助に行けそうな人探してくれて。松田さんとの救助らて」

星野（避難誘導班）：それと、あつしさん、失禁してたて。年食ってることもあるろうけど、挫滅症候群の恐れもあるんだ、できるだけ早く医者に診てもらったほうがいいて

長島（梶金区長）：なにい？そりや大変だ。重症らねか。支所に緊急要請して助けてもらおうて。すぐに衛星携帯電話使って連絡するて

区長は衛星携帯電話を使って支所へ連絡する

松田（支所職員）：「こちら山古志支所災害対策本部です。緊急ですか？」

長島（梶金地区区長）：「もしもし、こちら梶金地区集落センター区長の長島です。緊急らて、梶金地区の松田淳さんが足がひどく痛いと言っていて、骨折の疑いが強いて。あと失禁もしてるすけ、挫滅症候群の疑いもあるて。道路も支所・竹沢方面、木籠集落方面が塞がれていて車での救援・救助は無理だて。大至急ヘリコプターでの救助を要請しますて。」

松田（支所職員）：「了解しました。確認します。梶金地区の松田淳さんが負傷。足がひどく痛がつており、骨折・挫滅症候群の疑いがあるためヘリコプターでの救助を要請でよろしかったでしょうか？」

長島（梶金区長）：おお、そうらて、早く頼むて

松田（支所職員）：「では、梶金郵便局横の空き地にヘリコプターを派遣するので、負傷者を搬送するように」

長島（梶金区長）：「おお、わかったて」

松田（支所職員）：「すみませんがいま指示したことを復唱して下さい」

長島（梶金区長）：「なんだいや、急いでるてがに・・・『梶金郵便局横の空き地にヘリコプターを派遣するんだ、負傷者を搬送する』でいいが？

松田（支所職員）：ありがとうございます。すぐに派遣しますので搬送をお願いします。

長島（梶金区長）：「おーい、避難誘導班の星野さん、何人か手伝いをつけるすけ、淳さんを担架に乗せて梶金郵便局の空地まで運んでくんねるか。ヘリコプターが助けに来てくれるんだ」

星野（避難誘導班）：「わかった。いま関さんが応急手当してるから、いま集めてもらった二人の若手連れて運んできます」

星野は集落センターにいる若者二名を連れて救助場所へ戻っていった

すると衛星携帯電話の呼び出し音が鳴る

避難者男A：「おーい、長島さん、電話鳴ってるれー、俺たち出らんねえんだろ。防災担当の人誰か出てくれて」

長島（梶金区長）：「おお、申し訳ねかったの、場所離れていたて。「はい。こちら梶金地区集落センター区長の長島です。」

丸山（支所職員）：「こちら山古志支所災害対策本部丸山です。すみません。そちらの被害状況報告の定時連絡をしてください。」

長島（梶金区長）：「おお、わりかったね。ええと、ケガ人は一名で、松田淳さんが骨折みてえらな・・・それと支所・竹沢方面が土砂崩れで・・・」

丸山（支所職員）：「ちよっと、区長さん、そこにある定時連絡票に沿って報告してください。困りますて。」

長島（梶金区長）：「あ？定時連絡票？おお、これか。これの順番な。わかった。」

丸山（支所職員）：「避難者数は？」「負傷者は？」

長島（梶金区長）：「ええと、避難者は四一名で」

丸山（支所職員）：「避難者四一名ですね。」「負傷者は？」

長島（梶金区長）：「負傷者は、一名・・・」

丸山（支所職員）：「負傷者一名ですね・・・火災の状況はどうですか？」

長島（梶金区長）：「初期消火班三名が消防出動し、鎮火しました。」

丸山（支所職員）：「ありがとうございます。一時間後の定時連絡はお忘れの無いようにお願いします。」（電話を切ろうとする）

長島（梶金区長）：「ああつ、ちよっと待ってください。梶金の子供たちが数名、今日の小中学校のイベントに行ったんだけど、何の連絡もねえ。みんな心配してるんだ。何か連絡はないのか？」

丸山（支所職員）：「小中学校とはまだ連絡が取れていないのです。なので何の情報もわかりません。」

長島（梶金区長）：「みんな心配してるんだ、何かあったら連絡貰えねえるか」

丸山（支所職員）：「こちらからは緊急以外は連絡できませんので、定時連絡の時に報告します。次の定時連絡の時間は午前一〇時三〇分です。なので、定時連絡票に記入をし、順序に沿って報告をお願いします。」

長島（梶金区長）：「わかったて。（切る）」

初期消火班の五十嵐雄一が戻ってきて、区長さんに学校の子供たちの安否を聞く。

五十嵐雄一：区長さん、うちのまみが今日イベントで学校いつてがあて、電話も携帯も使えねえんだ、どんななってるか解らねえんだ。支所から何か連絡はなかったろか？

長島（梶金区長）：いやあ、今ほど支所からの電話で聞いたんだけど・・・まだ支所のほうも学校と連絡が取れてねえみてえら。

五十嵐雄一：そうか・・・心配らなあ・・・。先生もいるんだろうから大丈夫だとは思うけど・・・心配らなあ

娘のまみを心配する五十嵐雄一。妻の恵美子も給食給水班の手伝い作業をしながら心配するのだった。

（第2回終わり）

（クロージング：ナレーション）

このドラマは、住民をはじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して、災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーションとして、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から、意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

本ドラマに関するご意見、ご感想などを、独立行政法人防災科学技術研究所、またはFM長岡までお寄せください。

地域防災ラジオドラマ 現状とドラマ（フィクション）との相違点

- 2004年の新潟県中越地震は本ドラマの舞台である新潟県古志郡山古志村（現在の長岡市山古志地区）や北魚沼郡川口町に大きな被害をもたらしました。この地域は地すべり地形といって、斜面が滑動しその上にある構造物に大きな被害をもたらす可能性のある地形が至る所にあります。そこで震災後は非常に広範囲に土留めの工事をしたり、集落によっては集団移転をしたところもありました。今回、山古志地区では2009年10月の防災訓練をするための計画として、地域に起こりうる災害の種類や規模をワークショップで議論し、梶金集落では前回と同様の直下型地震が発生することを前提としたシナリオをベースに検討を行うことになりました。ただし建物やインフラ（道路やライフライン）は前回の震災後相当に改修・改善が進んでいますので、前回のような壊滅的な被害は出ないだろうという想定で検討することになりました。したがってドラマでは建物が全面的に倒壊するような被害や、地形が大規模に崩落するような被害は出てきません。しかし、屋内で住民が怪我をしたり、安否が不明で確認が容易でないシーンは登場します。これらはワークショップで議論された地域住民自身によるミクロな被害想定がベースとなっています。
- 中越地震の後、山古志地区ではすべての集落に衛星携帯電話の端末を配備しています。ドラマでは混乱を避けるため各集落からの通信が一定のルールを守ってかけられることを想定しています。実際に災害にあったときに、どの程度このルールに従って通信できるかは未知ですが、ドラマでは現状の通信体制が持つ限界も含めて、わかりやすい形で表現してあります。今後、中山間地における住民の安否確認の問題を考える中で、この課題を解決するさまざまな提案や工夫が出てくることを期待しています。
- また、第3話では、受話音量が小さい、充電端子が自動車のソケットに入りにくい、机が無く話しにくい、というシーンが登場します。これは、2009年10月18日（日）に実施した震災対策訓練で、実際に起きたトラブルです。自動車からの充電の問題は訓練当日に解決しましたが、受話音量が小さいという課題は解決できず、訓練反省会で復唱ルールを作るという提案がありました。
- 支所と小中学校との連絡手段については、支所、小中学校共に課題であるとの認識しており、対策について検討しております。